

漢詩人としての阪口五峰

―竹を題材とした詩について―

田 春 娟

Abstract

This is a study of bamboo poems in Chinese made by Sakaguchi Gohō (1859-1923), father of Sakaguchi Ango. Although Sakaguchi Gohō is known as a statesman, he was also a poet who wrote his poetry in classical Chinese. This study discusses his four Chinese poems which have "bamboo" for their material. By paying attention to the sources of which Gohō made use, it becomes clear that what Gohō wanted to express in these poems is his longing for seclusion or the world of hermits.

キーワード……阪口五峰、漢詩人、竹、釣徒、拂珊瑚

はじめに

作家・坂口安吾⁽¹⁾に「石の思ひ」⁽²⁾、『光』昭二一（一九四六年一月）という自伝的小説がある。主な内容は安吾の幼少年時

代の家や家族などについてのことである。

私の父は二三流ぐらゐの政治家で、つまり田舎政治家とでも称する人種で、十ぺんぐらゐ代議士に当選して地方の支部長といふやうなもの、中央ではあまり名前の知られてゐない人物であつた。しかし、かういふ人物は極度に多忙なのであらう。家にゐるなどといふことはめつたにない。ところが私の親父は半面森春濤門下の漢詩人で晩年には「北越詩話」といふ本を三十年もかゝつて書いてをり、家にゐるときは書斎にこもつたきり顔をだすことがなく、私が父を見るのは墨をすらされる時だけであつた。

坂口安吾は「石の思ひ」の最初の部分に右のように書いている。安吾の思ひ出に現れた父親・五峰⁽³⁾は政治家というだけではなく、明治時代の代表的漢詩人の一人森春濤の門下の漢詩人でもあり、政治業務などの仕事に追いかけてゐる一方で、三〇年もかけて『北越詩話』を上梓するというような、漢詩と切っても切れない縁を持つ人物でもあつた。

五峰の漢詩文については、坂口守二や岡村浩などによって研究が行われている。坂口守二の場合は、主に五峰の少年時代の漢学学習や文人との交流、五峰の日常などに注目し、研究している。岡村浩の場合は、主に五峰の書や印癖や遺墨などについて考察している。岡村は五峰が「政界に身を置きつつ多くの人物と交わり

を結ぶ中で、生涯彼が漢詩を交流の媒体として片時も手離さなかったことは特筆すべき⁽⁴⁾であると指摘している。しかし、五峰の漢詩の内容については、これまでほとんど考察がなされていないのが現状である。

本研究では、今まで追究されることのなかった五峰の漢詩文を取り上げ、漢詩人としての五峰について考察したい。研究対象として、取り扱う資料は主に『五峰遺稿』（上、中、下）とする。『五峰遺稿』目録によると、巻上に古今体詩一五三首、巻中に古今体詩一七九首、巻下一に古今体詩六〇首が収められている。合わせて、三九二首になる。他にも、『五峰遺稿』に収録されていないかった詩文も少数ながら存在している。それらも加えて五峰の漢詩について分析したい。

今回、取り上げる漢詩は、竹についてのものである。というのは、五峰は竹に関する詩を二〇首近く創作しているからである。そのうちで、今回、特に注目したいのはその中で類似した内容と表現を持つ四首の詩である。これらの詩を書いた時期は二〇年にわたる。漢詩人五峰は竹の詩を凡そ二〇年間に渡って書き続けたわけである。その他に五峰は竹の絵もよく描いている。村山真雄⁽⁵⁾は、「岳父坂口五峰の思い出」⁽⁶⁾において次のように書いている。

（前略）書は半切扇面^{せん}などに、適当大の物を好んでものされた額面の文字は書かれたものは稀^{まれ}である。画は数竿^{かん}藏夜雨な

ど題して黒竹^{マツ}だけ、これは晩年蘇籠せられてから蘇^そ倉老人の名で描かれた。家で書をかゝれる事は稀^{まれ}の方であつて多くは遊説などの出先に於いてである。（後略）

村山の思い出によれば、画は墨竹^{マツ}だけしか描いていない。なぜ五峰はこれほど竹についてこだわっていたのか。竹は五峰にとって、どのような意味を持っていたのだろうか。あるいは、竹に託して、何を表現したかったのか。五峰の「竹」の詩を分析し、五峰竹詩の深層を追究しよう。

一、詩、書、画一体の作品

岡村浩（号鉄琴）は「阪口五峰展」始末記と今後の展望⁽⁷⁾（二〇〇七年一〇月）にこの展覧会の主要出品作である「黒竹自画讃大幅」について次のように書いている。

新津ゆかりの作品から紹介すると、黒竹自画讃大幅がある。縦一八一・横九一センチメートルに及ぶ紙面に、五峰としては珍しい巨岩と濃淡の差違の美しい枝ぶりの良い竹を描く。

左上部には、

湘江の烟雨碧模糊たり。乍^{たちま}ち憶う吾が生本と釣徒なると。何れの日か一竿を截し^も将て去り。東海より^{マツ}珊瑚を^も払わんと欲す。

と画讀を自作詩文で付す。(後略)

画に書かれた漢詩の原文は、以下のとおりである。

湘江煙雨碧模糊 乍憶吾生本釣徒

何日截将一竿去 欲従東海拂珊瑚

落款によれば、「辛亥夏日」の作品である。明治四四(一九一一)年夏、五峰五三歳の時の詩だと岡村⁽⁸⁾は考証している。この竹と岩との水墨画も五峰の手に出来上がったものであることが明らかにされた⁽⁹⁾。

この七言絶句を詳しく分析しよう。まず、一句目の「湘江煙雨碧模糊」を見よう。「湘江は雨に煙ってぼんやりとした深緑色である」と詠い起す。湘江の水面に雨が降っている。その雨は碧緑の湘水と混じりあい、深緑色にぼんやりとしている様子が描かれている。この起句で用いられている「碧」という言葉は後の三句とのつながりで重要な役割を果たしている。単なる川水の色と雨のぼんやりと深緑色の状態の描写ではなく、主眼とされる竹のことにもつながっている。(湘江の両岸には竹林があるかもしれないことを暗示している)。「碧」は湘江との関係では「碧湘」⁽¹⁰⁾という連語として用いられ、「湘江の美称」でもある。

この「碧」という字は、転句に出てくる釣竿の竹と結びついている。竹の異名として「碧虚郎」⁽¹¹⁾という単語がある。『述異記』⁽¹²⁾

には次の記述がある。

湘水去岸三十里許、有相思宮、望帝臺、昔舜南巡而葬於蒼梧之野、堯之二女娥皇・女英、追之不及、相與慟哭、淚下沾竹、竹文上爲之斑斑然。
〔述異記、上〕

その「斑斑然」とは「斑竹」の斑点のことである。「湘江」↓「湘水」↓「湘妃」⁽¹³⁾↓「湘妃竹」(「斑竹」の異称)↓「斑竹」の連鎖関係で、湘江風景から本題の「竹」まで連想される。

次に、「乍憶吾生本釣徒」という二句目である承句は以上のような起句との連想関係を受け、「たちまち私の一生は本来一人の釣り人だと思ひ出した」と詠う。

そして、「いつの日か一竿の釣竿をたちきつて、持って行く」と転ずる。どこへ、何をするため、持つて行くのかという疑問を読者から引き出し、最後の四句目である結句を導き出す。

結句は、転句から導き出された「欲従東海拂珊瑚」と詠い、この七言絶句を収束する。どこへ、は「東海」へ、何をするため、は「拂珊瑚」をするためである。「珊瑚」は海底に生ずる樹枝状をなす植物であると考えられていた⁽¹⁴⁾。大変珍しいし、美しいものだとも考えられている。東海でこのような珍品をかすめて通ろう、と言うのであるが、この行為の意味が不明である。このことについて、後に追究しよう。

ここで「拂珊瑚」の「拂」という言葉の意味を説明しておく。

日本語では、「拂」という語は「払う」、「取り除く」などの意味で使われているが、「拂珊瑚」の「拂」は中国語としては、「すぎる」かすめる。ふれる¹⁵という意味で使われている。

前述のように、起句の「碧」は「拂珊瑚」の道具である釣り竿のことを暗示している。というのは、「碧」は濃い緑色であり、「碧」から「緑」へ、「緑」から「竹」の緑色まで連想させるようになっていく。釣り竿は竹製のものが多くだろう。詩文には「竹」という漢字は使われていないが、読者に竹のことまで連想させるようになっていく。

また、この詩文の右側に左のような画が描かれている。水墨画であるため、色の「碧」ははっきりとは感じられないが、竹の枝や葉などの形から見れば、勢いが強い竹の印象を与える。「碧」竹というものは「拂珊瑚」の道具であり、吾が人生はもと一人の釣り人であることを思い起こし、「東海」の珊瑚に触ろうと思っているというこの詩は一体何を言おうとしているのか、五峰の他の竹についての詩を分析し考察していきたい。



二、他人の画、五峰の詩と書

竹についての漢詩は五峰にはこれだけではない。二〇一〇年二月一三日に催された「坂口家のお宝 大博覧会」にも、もう一首の竹についての詩がある。「一」に述べた詩と良く似たものである。

凌雲餘勢翠模糊 乍憶吾生本釣徒
何日截将一竿去 直従東海拂珊瑚

書き下し：

凌雲の余勢翠模糊たり。乍ち憶う吾が生本と釣徒なると。
たらしま

何れの日か一竿を截し將て去り。直ちに東海より珊瑚を拂わん。

掛け軸の落款には「壬子夏日」と書いてある。大正元（一九一二年）年の夏だと推測できる。とすれば、五四歳の五峰の漢詩になる。この漢詩は前述した「一」の中に取り上げた詩のちょうど一年後の作品である。この竹と岩との水墨画は五峰の作品ではないと岡村¹⁶は判定している。

では、右の漢詩を詳しく見ていく。これも七言絶句である。まず、起句の「凌雲餘勢翠模糊」から。「凌雲」は雲をしのぐように高いことであり、「凌雲の志」として一般的に使われているが、竹の異名として「凌雲處士」¹⁷という言い方もある。次の「餘勢」はありあまった勢いの意味であり、五峰は左の墨竹画の竹を見て、その細長く見える竹の勢いを詠っているといえるだろう。また、左の竹の画は少し薄い緑色が付いているが、その画に用いられている竹の色は「碧」ではなく、「翠」である。「翠」は「碧」より濃くなく、萌黄色に近い緑色である。また、「翠竹」¹⁸という言葉もあり、みどりの竹、緑竹である。この起句は前の詩とは違い、湘江の風景ではなく、竹の様子を現している。雲をしのぐ竹の勢いは薄青色でぼんやりとしているということである。

次に、承句では、「乍憶吾生本釣徒」、それは「一」に取り上げた詩文と完全に同じなので、特に説明する必要がない。

更に、転句の「何日截将一竿去」も、また、「一」に取り上げた詩文と完全に同じである。

最後に、結句では、「直従東海拂珊瑚」、直ちに東海で珊瑚を拂おうとなっている。これは「一」に取り上げた結句の最初の文字「欲」と違って、「直」になっている。転句の「何日截将一竿去」の目的はすぐさま東海より珊瑚を拂おうということであり、これでこの七言絶句が結ばれる。

一年後の詩の中では、一年前の詩の一句目の「湘江」を「凌雲」に変え、「煙雨」を「餘勢」に変え、「碧」を「翠」に変え、二句目は全く同じ、三句目も全く同じ、四句目の「欲」を「直」に変えている。それは一年間のうちに、世の中で起こった出来事や五峰自身の生活や心境の変化などから影響されているかもしれない。



三、大病後の詩

ところで、竹についての詩文はこの二首に止まっていない。『五峰餘影』¹⁹に収められた内藤久寛「五峰阪口先生を憶ふ」によると、以下のような漢詩もある。

凌雲餘勢碧模糊。 乍憶吾生本釣徒。

何日剪将一竿去。 經從東海拂珊瑚。

辛酉三月

五峰老樵

落款から推測すれば、大正一〇（一九二一）年三月、五峰六三歳の作品である。この詩の創作背景について、内藤²⁰は以下のよう書いている。

（前略）又一面には新潟新聞社の社長であり、記者であつて、雄健の文章を以して操觚界に重きを成して居た。詩人として當時既に高名なりしことは申す迄も無い。晩年に及んでは実業界を去り、専ら衆議院議員として中央の政界に馳駆し、憲政会の重鎮として目せられた。（中略）大正十年三月、もはや餘命二ヶ月に過ぎずとの医師の診断を伝聞して、取敢へず牛込の寓居を訪ひたるに瘦軀に病容を湛へては居たが、依然たる元氣であつて、さばかりの重態とも思はれぬ程であつた。

茲に於て予は市島春城君と謀り、決別の宴を張る内意にて、築地の旗亭瓢家に小宴を催ほした。来り会する者阪口五峰、久須美雪堂、市島春城、田邊碧堂、廣井紅秋、柳江書伯並に予栗城の七名で、酒酣はにして絹紙を展べ、各々得意の筆を揮つた。中に雪堂翁の竹を描きたるに、五峰先生左の一詩を題したが、筆勢奔放にして、病者の作とは思はれないものであつた。

右の内藤の思い出によると、五峰は雪堂の竹の水墨画を見て、即興的にこの詩を作り出したとあるが、右にあげた詩からもわかるように、少々の字句の異同のある詩が以前から作られていたのである。五峰の年譜資料から分かるように、五峰が発病したのは大正九年一〇月ごろであり、その後、段々快復し、大正一〇年一月また再び発作が起こった。右の漢詩はその病の快復する段階の作だろう。

詩の書き下し：

凌雲の余勢碧模糊たり。 乍ち憶う吾が生本と釣徒なると。

何れの日か一竿を剪んで将て去り、東海より経て珊瑚を拂わん

「一」に取り上げた漢詩の年代からすると、凡そ一〇年後の漢詩であり、「二」の詩からは九年後の詩である。この三首の七言絶句を並べてみると、三首の共通点と相違点とは一目瞭然である。

一

湘江煙雨碧糢糊 乍憶吾生本釣徒

何日截將一竿去 欲從東海拂珊瑚

二

凌雲餘勢碧糢糊 乍憶吾生本釣徒

何日截將一竿去 直從東海拂珊瑚

三

凌雲餘勢碧糢糊 乍憶吾生本釣徒。

何日剪將一竿去。 經從東海拂珊瑚。

以上の三首はいずれも七言絶句の正格の平仄に則っており、平仄を正すために推敲したわけではなかったことが分かる。では、単なる推敲作業でないとしたら、この変化は何を意味するのか。

四、最初期の詩

『五峰遺稿(中)』⁽²¹⁾、『五峰遺稿』の編集順番を参考にすれば、以下の詩は明治三八(一九〇五)年、五峰四七歳の作品だと推測できる。)に左のような「畫竹」の詩がある。右の「一」の詩よりさらに六年前の詩である。

畫竹

小園修竹翠煙紆 竹裏幽人本釣徒

何日剪將一竿去 直從東海拂珊瑚

書き下し文：

小園の修竹翠煙めぐる 竹裏の幽人本と釣徒なる

何れの日か一竿を剪んで將て去り 直ちに東海より珊瑚を拂わん

まず、起句を見よう。「小さい庭園の中の長く延びた竹に緑色の煙がまつわり漂う」という竹園の風景が描かれている。

次に、承句では、「竹園に世を避けて隠れ居る人は、本と釣徒である」というふうに起句と繋がっている。

そして、転句では、「いずれの日かにその竹を釣竿一竿分剪んで持っていく」と、転換するのは、承句から見れば、全くの突然ではないかもしれない。釣竿は釣徒にとって必須な道具である。

最後に、結句では、竹の一竿を剪んだ目的を明示している。「すぐに東海に行つて珊瑚を拂う」という目的である。

廣井一は『明治大正北越偉人之片鱗』⁽²²⁾に収められた「北越政治界の驍將、詩壇の明星阪口仁一郎氏」という文章の中で、五峰について、以下のようなことを書いている。

(前略)氏は時折筆者などに、僕は作詩は即吟が出来ない、長く思考し深く彫琢せざれば物にならぬが、議論や争議は却

て当意即妙の方が、上乘の作となつて敵手を苦むることが出来る」と云はれたが（後略）

この五峰の言葉からすると、彼は漢詩を即興で作ることができず、時間をかけ、推敲を重ねて作っていたらしい。

これまで挙げてきた四首の竹の詩をみれば、確かに五峰自ら語っていた通り、漢詩を作るときに、推敲を重ねている。しかし、そのいずれにも「釣徒」という言葉が常に用いられている。それは十数年という歳月に渡つて、五峰の心の中に蔵されていた重要な意味を持つ言葉であつたに違いない。この「釣徒」という言葉の意味をその出典にさかのぼって調べてみよう。

五、「釣徒」

『新唐書』『列傳』隱逸の中に、張志和（七三〇年頃—八一〇年頃）²³ について以下のような記述がある。

張志和字子同，婺州金華人。始名龜齡。父游朝，通莊、列二子書，為象罔、白馬證諸篇佐其說。母夢楓生腹上而產志和。十六擢明經，以策干肅宗，特見賞重，命待詔翰林，授左金吾衛錄事參軍，因賜名。後坐事貶南浦尉，會赦還，以親既喪，不復仕，居江湖，自稱煙波釣徒。著玄真子，亦以自號。

右に書いてあるように張志和は自分のことを「煙波釣徒」と称している。只の「釣徒」ではない。張志和という人物は隱者であり、亡くなる方法も仙人的である²⁴。ところで、五峰の一首目の竹の詩には「煙雨」という語を使っている。「煙波」と類似しているだろう。張志和の伝には、竹が触れられていないが、五峰は「年憶吾生本釣徒」と詠っている。五峰は模糊としている煙雨の中の深い青みの竹林から我が身は「本と釣徒」だと自覚している。これは五峰の心中では、竹から釣徒へという連想が自然であつたからであると考えられる。

また、張志和の場合、「不復仕，居江湖，」（仕に復らず、江湖に居る）と記されているように、再び仕途に入らず、隱者になるという決心をしていた。五峰の場合、この詩を作る時に、既に仕途に入っている時期になるが、では、五峰の当時の心境はどのようなことになるか追求しなければいけないだろう。以下、五峰生涯と以上の四首の竹詩の関係を検討したい。創作年代順で見よう。

まず、「四」に取り上げた詩の創作背景を纏めてみよう。この詩は明治三八（一九〇五）年の作であり、五峰四七歳の年である。『明治大正北越偉人の片鱗』²⁵によると、明治三五年八月に行われた第七回衆議院議員総選挙で五峰は初当選する。『日本人名大辞典』²⁶によると、五峰の当選は明治三五年八月当選以来、合わせて八回とされている。つまり、第七回（一九〇二年）衆議院議員総選挙から第一四回（一九二〇年）衆議院議員総選挙まで毎回当

選したわけである。「明治三十六年十一月二十九日新潟縣進歩黨大會を開きたる時、ある議員から憲政本黨に復舊するの意を以て、新潟縣進歩黨を解散すとの動機が突然提出せられた、二三の異議者ありしも可決し、復黨に関する諸般の手續」²⁷が整った。これから五峰は中央政界で代議士として働くことができるようになった。これらの出来事は五峰が前述した最初の竹詩（「四」）を創作する前のことである。最初の竹の詩には、地方議員から中央議員に選出された後の五峰の心境がうかがえるだろう。地方議員のやり方そのままで中央政界では通じないところがあると五峰が自覚したと考えられる。

それから、「一」に取り上げた詩の創作の周辺を見よう。この詩は明治四四年夏の漢詩であり、五峰五三歳の時である。『五峰餘影』²⁸と岡村浩の五峰年表²⁹から見ると、政治の波に翻弄されても、文人との交流を断たなかったのが見える。「一」の詩は落款によると、五峰が出身地に帰省し、新森楼という割烹で「酒席を張った際の作」³⁰である。宴の酣の時の漢詩だろう。「四」の詩の「小園修竹翠煙紆 竹裏幽人本釣徒」を「湘江煙雨碧模糊 乍憶吾生本釣徒」に変えている。すなわち、竹という漢字が消えてしまっているのである。

また、「四」の「何日剪将一竿去 直従東海拂珊瑚」から「一」の「何日截将一竿去 欲従東海拂珊瑚」へと変化したのが、その理由を追究すれば、五峰の政治的抱負に関係があると思われる。衆議院議員の初当選（一九〇二年）から十年近く中央政界と地方政

界との間を往来し、政治的、社会的経験を経てきたわけである。単なる「修竹」の中の幽人ではなく、もっと広い世界へ目を向けるべきだと覚悟してきたと思われる。缺で竹を「剪」むではなく、様々な手段で竹を「裁」することにしたと読み取れる。次第に、「直」に東海の珊瑚を拂うのではなく、東海の珊瑚を拂うことを「欲」することにした。そのため、珊瑚を拂うことは急がなくても、いつでもいいことになる。

次に、「二」に取り上げた詩の創作背景を見よう。これは大正元（一九一二年）年の夏の漢詩であり、当時五峰五四歳になる。この詩はちょうど年号が変わる時期の作品である。明治天皇が七月三〇日に崩御ということと、この漢詩は夏の創作時期であり、どちらが前か後かはつきりと判断を下すことが出来ないが、とにかく「一」の詩と比べると、かなりの用語の違いがある。「一」の起句「湘江煙雨碧模糊」は「二」の「凌雲餘勢翠模糊」へと大きく変更された。「湘江」から「凌雲」へ、「煙雨」から「餘勢」へ、承句の部分は全く変わっていない。つまり、「湘江」や「煙雨」といった自然風景から「凌雲」や「餘勢」といったやや抽象的な形に書き換えている。一年前の詩より壮大な志が「凌雲餘勢」によって、表されている。しかし、同時に、「碧」から「翠」への転移によつて、その抱負が薄くなってきた感覚も与えられている点を見逃すことが出来ない。「碧」とは濃い緑色であり、「翠」とは薄い緑色である。この漢字の変化で五峰自身の心境の変化を表していると思われる。転句の「何日截将一竿去」は「一」でも「二」で

も、変わっていない。「二」の結句「欲従東海拂珊瑚」は「二」の「直従東海拂珊瑚」へと変化するが、それは「四」の結句「直従東海拂珊瑚」へと戻っただけである。作者の心境は初心に戻ってきたのだろう。やはり、様々な手段で直ぐに東海の珊瑚に触りたい気持ちに戻ってきたと推測できる。

最後、「三」に取り上げた詩の創作までの時代状況や五峰身辺のことに注目しよう。この漢詩は大正一〇（一九二一）年三月の作品であり、五峰当時六三歳である。前述のように内藤の思い出によると、五峰が病気になるって、回復した後の詩である。「二」の創作時期大正元年から大正一〇年までの出来事³¹を見ると、大正一〇年の病気の再発が内藤の思い出と一致している。その発病の後の回復段階で五峰はその「三」の漢詩を書いたと推測できる。「二」起句の「凌雲餘勢翠模糊」から「凌雲餘勢碧模糊」になっている。「翠」から「碧」に戻ってきたのである。そういうことは薄い色から濃い色まで変化し、戻ってきた。大病から回復し、更生された五峰の気持ちを照らしている。承句は変わっていないが、「二」の「何日截将一竿去 直従東海拂珊瑚」から「三」の「何日剪将一竿去。経従東海拂珊瑚」へと書き換えている。「截」から「剪」に変化してきたが、それは病と闘っていた六〇代の翁の心境の表現だろう。あまりに気力や体力がなく、様々な手段より気楽に切ることができる道具の缺で一竿を切ってもよろしいだろうと思われる。結句では「直」から「経」に入れ替えている。直ちに東海で珊瑚を拂わなくてもいいから、東海を経過し、珊瑚を拂

えばいいという心境の変化を表していると考えられる。

六、「拂珊瑚」（一）

竹の詩の中で、もう一つ注目したい言葉がある。それはこれまで挙げたすべての竹の詩の結句にある「拂珊瑚」である。珊瑚を拂うという行為の意味は解しにくい。いったいそれは何を意味しているのか。

杜甫（七一二年～七七〇年）に「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」³²という、この詩句の典故であろうと思われる注目すべき詩がある。

送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白

巢父掉頭不肯住。東將入海隨煙霧。
詩卷長留天地間。釣竿欲拂珊瑚樹。
深山大澤龍蛇遠。春寒野陰風景暮。
蓬萊織女回雲車。指點虛無是征路。
自是君身有仙骨。世人那得知其故。
惜君只欲苦死留。富貴何如草頭露。
蔡侯靜者意有餘。清夜置酒臨前除。
罷琴惆悵月照席。幾歲寄我空中書。
南尋禹穴見李白。道甫問信今何如。

書き下し文：

孔巢父が病と謝して帰り、江東に遊ぶを送り、兼ねて李白に呈す⁽³³⁾

巢父頭を掉りて住まるを肯んぜず
東將に海に入りて煙霧に随わんとす

詩巻長しえに留む天地の間
釣竿払わんと欲す珊瑚の樹

深山大沢竜蛇遠し
春寒野陰風景暮る

蓬萊の織女は雲車を回らし
虚無を指点す是れ征路

自らはれ君が身に仙骨有り
世人那ぞ其の故を知るを得ん

や

君を惜しんで只だ苦死して留めんと欲す
富貴は何ぞ草頭の露に

如かん

蔡侯は静者にして意余り有り
清夜酒を置きて前除に臨む

琴を罷め惆悵すれば月席を照らす
幾歳か我に寄せん空中の書

南禹穴を尋ねて李白を見ば
道え甫問信す今何如と

大意は以下のとおりである。孔巢父は病を理由に仕途から離れようとした。そのとき、杜甫はそれを止めようとしたが、孔巢父は杜甫の意見など聞こうとせず、東の海へ行き、煙霧に従おうとする。しかし、孔巢父の詩は末永く世の中に残るだろう。釣竿で珊瑚の木に触ろうと考えている。その後の四句は、仙境に行く道

や自然環境などを暗示する。孔巢父には既に仙骨があり、世の中の人たちにはそれが分からなかったのである。杜甫は孔巢父の去ることがとても残念であるため、苦心して引きとめようとしたが、世間の富と名譽は孔巢父にとって、只の草の葉の上の露のようなものに過ぎない。蔡侯は静かな人間であり、情けがあまりあり、涼しく爽やかな夜、前の階段でお酒を置いて臨む。琴を弾くのも止め、嘆きうらみ、月は席を照らす。この別離の後、いつ頃、私にお手紙を寄せるか。会稽で李白に会ったら、杜甫が今いかがお過ごしでしょうかと問うていたと伝えてください。

『旧唐書』³⁴⁾には、孔巢父について、以下のような叙述がある。

孔巢父、冀州人、字弱翁。(中略)巢父早勤文史、少時與韓準、裴政、李白、張叔明、陶沔隱於徂來山、時號「竹溪六逸」。

『旧唐書』によれば、孔巢父は冀州(今の河北省冀県)の人であり、早く詩文や史書などに勤め、また、若いときに、韓準、裴政、李白、張叔明、陶沔とともに山東の徂徠山に隠居したことがあり、「竹溪の六逸」と呼ばれたことがうかがえる。では、この時期の李白のことについても調べよう。

『旧唐書』³⁵⁾には、李白について、左の記述がある。

李白字太白、山東人。(中略)少與魯中諸生孔巢父、韓沔、

裴政、張叔明、陶沔等隱於徂徠山、酣歌縱酒、時號「竹溪六逸」。天寶初、客遊會稽、與道士吳筠隱於剡中。

右の資料を見れば、李白は若いときに、孔巢父、韓沔、裴政、張叔明、陶沔とともに、徂徠山に隱居し、酒をほしひままに飲んで好きなだけ歌い、時に、「竹溪六逸」と呼ばれた。天寶の初（西暦七四二年）会稽を客遊し、道士吳筠とともに剡中（今の浙江省の剡溪）に隱居した。『旧唐書』³⁶の吳筠についての記述は以下の通りである。

吳筠、魯中之儒士也。少通經、善屬文、舉進士不第。（後略）

天寶中、李林甫、楊國忠用事、綱紀日紊。（中略）既而中原大亂、江淮多盜、乃東遊會稽。嘗於天台剡中往來、與詩人李白、孔巢父詩篇酬和、逍遙泉石、人多從之。

吳筠は魯中（今の山東省）の儒者である。少年時代から經書に通じ、作文に善くし、進士に挙げられたが落第した。天寶中、東へ会稽を遊ぶ。嘗て天台と剡中との間を往來し、詩人李白、孔巢父とともに詩文を作りあって報い答えている。泉石を逍遙し、人が多くこれに従う。

以上のような李白、吳筠についての記述から、孔巢父は李白、吳筠とともに隱逸生活を送ったことが分かる。

杜甫の詩の題から見ると、孔巢父が病氣を理由に辭職して帰り、江東（江蘇・浙江省）への歸遊の旅に出るのを杜甫が見送った時の事を、共通の友人であり、そのころ会稽（浙江省紹興市）に隱棲していた李白に与えた詩である。時は天寶五（七四六）年、杜甫三五歳の作品である。詩の内容から見れば、孔巢父は朝廷から離れ、李白が隱逸している会稽へ隱居する決意を持っていることがうかがえる。

この詩の内、ここに關係するのは、四句目「釣竿欲拂珊瑚樹」である。この詩句の意味は、「わが身は釣竿で海中に生える珊瑚の木を払おう」³⁷ということである。

孔巢父は杜甫が引き留めるのを聴かず、東方にある海に漂っている煙霧の中に入っていこうとする。そのときに、釣り竿で海底³⁸にある珊瑚樹をかすめて通ろうというのである。孔巢父はこの時また隱逸生活を過ぐす決心したのだと思われる。「東海」は中国人にとつては仙人と結び付く海である。例えば、劉憲（？～七一一年頃）には、以下のような詩³⁹がある。「蒼龍闕下天泉池。軒駕來遊簫管吹。綠堤夏篠繁不散。冒水新荷卷復披。帳殿疑從畫裏出。樓船直在鏡中移。自然東海神仙處。何用西崑輶迹疲。」その「神仙處」の東海で、珊瑚に触れようという釣徒の願いが表明されている。東海は仙人たちが住んでいる所だと言われており、「有仙骨仙骨を有する」の孔巢父は仙人たちがいる場所に行こうとしていると杜甫には考えられたのだろう。珊瑚を拂うという行為は、神仙処としての東海での象徴的な行為である。

そこで、前述した五峰の四首絶句の結句にある「欲従東海拂珊瑚」（一九一一年）「直従東海拂珊瑚」（一九一二年）「経従東海拂珊瑚」（一九二一年）「直従東海拂珊瑚」（一九〇五年）と比べてみよう。杜甫の詩に「釣竿」が出ている。五峰の四首には「釣竿」という言葉が直接に使われていないが、転句に出ている「何日截将一竿去」「何日剪将一竿去」という転句と結句との間にある首尾呼応関係がはつきりと表されている。「釣竿」という単語は二字語として使われていないけれども、「釣竿」二文字を分けて使われ、明確なイメージとなっている。

「拂珊瑚」（二）

『杜詩叢刊』⁴⁰にある杜甫の詩の諸注釈を参照すると、「拂珊瑚」については、次のように纏めることができる。

「拂珊瑚」について、直接的に解釈していないが、「釣竿欲拂珊瑚樹」の句について、「七字浩然以其将隠也」⁴¹と評しているものがある。その意味は孔巢父は俗事から解放された屈託のない心境になり、将に隠者になろうとしているということである。

また、「（前略）一似掉頭不肯住者。謝病東歸。将入海。獨把釣竿。海底珊瑚。不難拾取。但東海之處。（後略）」⁴²という解釈では、海底の珊瑚を釣竿で拾い取るということになる。何のために取るかといえば、「珊瑚似瑠璃有五色青者可入藥爲上生海底漁人常以網掛得之」⁴³という注では、仙薬とする珊瑚を漁師は網に引つ

掛けて取るが、孔巢父は釣竿で取るということになるのだろう。さらに、趙次公は、「以其在海底故以拂言之也言巢父帰江東之後遂乃入海有此興也」⁴⁴と、言う。その意味は孔巢父は江東に帰った後、海に入り、海底に生える珊瑚を拂うという楽しみを持つ、ということである。以上のような解釈から、孔巢父は東の方海に入つて煙霧に従い、海底の珊瑚を拂うという楽しみを持つと解釈されている。森槐南『杜詩講義 下巻』⁴⁵に以下のような説明が書かれている。

最初の處は、所謂の常人には其故を解し得られないと云ふ處から、突然と筆を著けます。當然の人情から申すと、一日も多く、此繁華なる都に、足を留めて置いて、功名利達の樂みを望むべきのであるが、獨り我孔巢父は頭を掉つて肯へて住らぬと云ふ有様である。而して何れに赴かれるかと云ふと、是より將さに東の地方を遍歴して、何處を宛てと云ふ處もなく、海に入つて、さうして煙霧の蒼茫たる間に、己れの一生を韜晦して、隠れやうと致されのである。併しながら夫が爲めに一生、名なきに終るのではない、即ち平生、作つて居られる詩は、長く天地の間に留つて、千古不朽に垂る詩卷が、最早や出來て居ることであるから、假令、其人は煙霧の間に隠れて仕舞はれても、其名の没することはないのである。それであるから、之より都會を去つて、超然として身をば釣竿に託して、其釣竿を以て、彼の東海の内に、珊瑚樹を横に拂

ふて進んで、遂には神仙の域に達せられる譯であるから、凡そ人間の中に、此位愉快なことはあるまいと思はれる。斯う申す意が、初めの四句にございますが、斗然として起つて來まして、煙霧の渺茫たる物が、目前に現れ出るやうな筆勢であります。（後略）

この森槐南の解釈によれば、「拂珊瑚」は「神仙の域に達するに至るための一過程である」と考えられているようであるが、その根拠は明らかでない。要するに、「拂珊瑚」という行為の具体的意味は『草堂詩箋』にいうように、海底の珊瑚を取って仙薬にするという仙人的行為であるか、あるいは、趙次公の言うように、隱逸世界の楽しみ的一种と解釈されている。いずれにしても、拂珊瑚」という行為は、隱逸や神仙の世界の行為と解釈されており、五峰はこのような解釈を知っていたのではないかと推測される。この詩句を自らの詩の中に用いることによって、隱逸や神仙の世界への五峰自らの憧憬を表現しているのである。

実は、杜甫のこの詩と明確な関連性を示す詩を五峰は書いていない。『五峰遺稿』の編集順番から見れば、それは明治三四（一九〇一）年、五峰四三歳の作品である。

寄懷佐渡舊知再疊韻

記取題襟慰客思 扁舟孤島阻風時

參商忽隔三秋別 天地誰留一卷詩
滄海無邊明月照 煙波有約白鷗知
釣竿何日隨巢父 去拂珊瑚十丈枝

『五峰遺稿（中）』46

書き下し文：

題襟を記取して客思を慰めよ 扁舟孤島に風に阻まれる時
參商忽ち三秋を隔てて別れ 天地誰か留めん一卷の詩
滄海無邊明月照らす 煙波約有り白鷗知る
釣竿何れの日か巢父に随ひ 拂ひに去らん珊瑚十丈の枝

大意は以下の通りである。「小船が離れ島で風に阻まれる時、書き留めておいた詩を思い出し、旅愁を慰めるがよい、」と佐渡島の旧友のことを偲んでいる。「參商」二星のように、忽ち三秋を隔てて別れ、長く相見ぬことになる。天地の間、君の他に誰か一卷の詩を残そうか。滄海は限りなく明月が照らしている。白鷗だけが煙波の誓いを知っている。いつか巢父に従って釣竿を携え、珊瑚の十丈の枝を払いに行こう。

右の七言律詩の尾聯「釣竿何日隨巢父 去拂珊瑚十丈枝」という詩句から見ると、五峰は杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」という詩を読んだことは確かだと推測できる。要するに、杜甫の「送孔巢父謝病歸遊江東兼呈李白」の詩は五峰の詩の「拂珊瑚

瑚」という言葉の典拠となっているのである。また、五峰のこの詩には「煙波」という単語が出て来ており、前述した「煙波釣徒」の張志和のことが連想される。張志和も孔巢父も五峰にとつては隠逸の人であり、これらの人物へと連想的につながっている五峰の竹の詩は、仙界あるいは隠逸への憧憬を表現していると考えられるのである。

結びにかえて

本論では、五峰の竹についての類似している漢詩四首に注目し、その詩句の典拠を分析した。その結果として、実生活では政治家として多忙であった阪口五峰は、漢詩人としては、その竹の詩において、少しずつ表現を変えながらも、仙界あるいは隠逸生活に対する憧憬を、約二〇年間に渡って一貫して表現し続けたことが明らかとなった。しかし、これで漢詩人としての阪口五峰の全体像が明確になったという訳ではない。この竹の詩の分析を端緒として、今後、五峰の漢詩人としての全体像に迫ってゆきたい。

〈注〉

(1) 岡村浩「『阪口五峰』としての文人像」『坂口安吾生誕百年祭 阪口五峰を中心とする文人の魅力』平成一八年一〇月二〇日 一六五頁以下のような説明がある。「安吾は『坂口』。兄の献吉は父の追悼録『五峰餘影』(S4刊)編集の奥付に、『坂口献吉』と名乗っているが、

他殆ど『坂口』姓を用いた。一方、父親の仁一郎は代表著作『北越詩話』(下巻T8刊)の署名をはじめ、今日みる遺墨はほぼ『坂口』姓を用いている。この度、多面的なその足跡の中でも特に文人たる事蹟に注目し顕彰の記録を留めようと試みるもので、したがって本姓は『坂口』だが、敢えて『坂口』姓を本企画では使用する次第である。」

(2) 坂口安吾「石の思ひ」『坂口安吾全集4』筑摩書房、一九九八年五月 二五一頁。

(3) 「五峰」は坂口安吾の父親・坂口仁一郎の号である。

(4) 岡村浩「越後路の篆刻家・山田寒山(VI)」『新潟大学教育人間科学部紀要』(第一巻第一号、平成一〇年九月三〇日) 三九頁

(5) 村山真雄は坂口五峰の四女セキの夫である。明治四三年八月、四女セキは松之山の村山真雄に嫁ぐ。

(6) 村山真雄「岳父坂口五峰の思い出」『月刊 いがた』第二巻 第五号、新潟日報社、昭和二二年 二九頁。

(7) 岡村鉄琴「『阪口五峰展』始末記と今後の展望」『坂口安吾生誕百年事業実行委員会記録誌 安吾探索ノート』第七号、安吾の会、二〇〇七年一〇月二〇日 九四頁〜九五頁。

(8) 前掲7 九四頁以下のような内容は解釈してある。款記に、「辛亥夏日遊新津邂逅七谷先生於新森樓酒間 先生作此図快甚予乃題一絶醉筆塗鴉不成字也 五峯醉樵恭」と記すことから、本作は明治四十四年夏、五峰五十三歳の時、地元へ帰省し割烹新森樓に酒席を張った際の作であると判明する。讀に七谷先生なるものが竹図を描いたとあるが、この絵もまた五峰の筆になるもので、謙遜してか余技たる墨画の作者を別人におきかえている点が興味深い。と岡村から説明してある。

(9) 前掲8。

(10) 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂版 卷八 大修館書店 平成八年一月一〇日 三八一頁。

(11) 前掲10 三八〇頁「事物異名録、樹木、竹」清異録、夏清侯傳云、曾大父碧虛郎、大父凌雲處士、父以卓立卿自名、就拜銀緑大夫、按謂竹也。

(12) 任昉撰『述異記』卷上 中華書局 一九九一年 四頁。

(13) 前掲10 卷七 一三一頁によると、湘妃とは、舜の二妃の娥皇・女英の称。舜を慕って湘水のほとりに来り、其の崩御を聞き身を投じて死し、湘水の神となったといふ。

(14) 任昉撰『述異記』(卷上 中華書局 一九九一年 二頁)に、「鬱林郡有珊瑚市。海先市。珊瑚樹碧色。生海底。一株十枝。枝間無葉。

- 大者高五六尺。至小者尺餘。鮫人云。海上有珊瑚宮。漢元封二年。鬱林郡獻珊瑚。」という叙述がある。韋応物（七三五年頃〜七九〇年頃）には以下のような詩——「詠珊瑚（珊瑚を詠う）」がある。「絳樹無花葉。非石亦非瓊。世人何處得。蓬萊石上生。」（『全唐詩』中華書局一九六〇年四月 第三冊 卷一九三 一九八五頁）。
- (15) 前掲10 卷五 一六六頁。
- (16) 授業で岡村先生にその展覧会の写真を見せて、先生からの判定である。
- (17) 前掲10 卷二 一五三頁。
- (18) 前掲10 卷九 一二〇頁。
- (19) 阪口献吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社、昭和四年一月三日 一五一頁。
- (20) 前掲19 一五〇〜一五一頁。
- (21) 阪口献吉編輯兼発行『五峰遺稿（中）』日清印刷株式会社、大正一四年一〇月二五日 二七丁ウ。
- (22) 廣井一編述『明治大正北越偉人の片鱗』一九二九年六月 七三六頁。
- (23) 歐陽修 宋祁撰『新唐書』（卷一九六「列傳」第二二一／隱逸）中華書局 一九七五年二月 五六〇八頁
- (24) 『統仙傳』卷上「飛昇一十六人内女真三人「玄真子」に張志和について、以下のような記述がある。「（前略）志和酒酣爲水戯鋪席於水上獨坐飲酌嘯詠其席來去遲速如刺舟聲復有雲鶴隨覆其上眞卿親實參佐顧者莫不驚異於水上揮手以謝眞卿上昇而去今猶有傳寶其畫在於人間」また、『歴世眞仙體道通鑑』（卷之三十六 張志和）にも類似している記述がある。
- 松村明監修『大辞泉』（増補・新装版）小学館 一九九五年一月 一七三七頁に「張志和」について、以下のような叙述がある。「中国、唐代の道士。水上にむしろを敷いて座し、酒を飲み、詩を詠じ、鶴に乗って昇天したという。画題とされる。生没年未詳。」
- (25) 前掲22 七八四頁に以下のような内容が書いてある。阪口氏は明治三十五年八月執行の大選舉區制初めて實行の時に代議士に當選し中央の政治舞臺に乗出し、直接各派の名士とも交際し政府當局者とも折衝し、政治の實務に參與するに至つたが、中央に出て見ると地方に居る時とは多少勝手が違ふ様になり越後の代議士に非ずして天下の代議士なれば、新潟縣進歩黨の小黨に立て籠りては、假令憲政本黨と進退を共にするとしても分家の身分では思ふ様に働けぬから何時か之を

- 解黨して本黨に復舊し大舞臺に入り活動するにしかずとの考へが阪口氏の胸中に往來して居つた。
- (26) 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社 二〇〇一年二月 八三二頁
- (27) 前掲22 七八五頁
- (28) 前掲19 七〇八頁
- (29) 明治三十八年六月 満州朝鮮戦地視察
- 明治三十九年一月七日から明治四一年七月一日まで第一次西園寺内閣。八月二四、五日に森槐南・永坂石棟・本田種竹・大久保湘南の四詩伯來越。行形亭（松風亭）、鍋茶屋にて歓待する。一〇月二〇日、五男・安吾誕生。一月父得七翁死去
- 明治四〇年 一月一日、清棲家教が新潟県知事になり、任期は明治四五三月二八日まで。三浦桐陰から名家の刻印を割愛され、謝礼に「謝三浦桐陰贈印兼寄橋蔵六」書を揮毫する。
- 明治四一年七月一日から明治四四年八月三〇日まで第二次桂内閣時代
- 明治四二年二月大養除名事件
- 明治四三年三月憲政本黨を解黨し又新會成申クラブと合し国民黨を組織す
- 明治四四年八月三〇日から大正元年一月二二日まで、第二次西園寺内閣時代
- (30) 前掲7 九四頁
- (31) 明治四五年（大正元年）五月第十一回衆議院議員當選 七月三〇日に明治天皇崩御 一月二二日から大正二年（一九一三年）二月二〇日まで第三次桂内閣時代
- 大正二年一月同志会創立準備委員となる 二月二〇日から大正三年四月一六日まで 第一次山本内閣時代 一〇月立憲同志会成り相談役となる 一〇月一〇日同志会創立委員長桂公爵薨去
- 大正三年「新潟新聞」「東北日報」と合併する 四月一六日 大隈内閣成る 八月世界大戦・日独参戦
- 大正四年三月二五日第十二回衆議院議員總選舉當選 七月大浦内相辞職
- 大正五年四月勲四等瑞宝章 一〇月憲政会成り党務委員長となる 一〇月九日に大隈侯勇退 一〇月九日から寺内内閣成立
- 大正六年詩に就いて国分青厓に講学す 四月二〇日第十三回衆議院議員總選舉當選 八月一日より更生の新潟新聞が発行された

- 大正七年四月一日より二五日まで市島春城の筆による『北越詩話』紹介文が発表される。憲政会総務となる。九月二一日 寺内内閣辞職九月二九日 原内閣成立 十一月『北越詩話』上巻出る
- 大正八年二月勲三等旭日中綬章 三月『北越詩話』下巻出版 八月、常磐花壇に国分青厓・田辺碧堂・日下勺水等詩人を招き詩会を催す 太田知事の時代
- 大正九年二月普選案にて議會解散 五月一〇日 衆議院議員当選 一〇月発病
- 大正一〇年一月再び上腹部に頓痛を覚え、東大病院に入院、余命二カ月と診断された。二カ月経っても、悪化することがなかった。「更生道人」「蘇庵」と号に改め
- (32)『全唐詩』中華書局 一九六〇年四月 第四冊 卷二一六 二二五九頁
- (33)前野直彬注解『唐詩選』(上) 岩波書店 二〇〇〇年一〇月一六日 一二四～一二八頁
- 黒川洋一編『杜甫詩選』岩波書店 一九九一年二月一八日 二四～二七頁
- 鈴木虎雄訳注『杜詩』(第一冊) 岩波書店 一九六三年一月一六日 四七～五〇頁
- 韓成武 张志民『杜甫詩全译』河北人民出版社 一九九七年一〇月二三～二四頁 以上の書籍を参考にし、まとめたもの。
- (34)劉昫等撰『旧唐書』卷一五四列伝一〇四 中華書局 一九七五年五月 四〇九五頁
- (35)劉昫等撰『旧唐書』卷一九〇下列伝一四〇下 文苑下 中華書局 一九七五年五月 五〇五三頁
- (36)劉昫等撰『旧唐書』卷一九二列伝一四二 隱逸 中華書局 一九七五年五月 五一二九頁
- (37)前野直彬注解『唐詩選』(上) 岩波書店 二〇〇〇年一〇月一六日 一二四～一二八頁
- (38)鈴木虎雄訳注『杜詩』(第一冊) 岩波書店 一九六三年一月一六日 五〇頁 「その身は釣竿を弄んで海底の珊瑚樹を払おうとおもうている。」と。
- (39)『全唐詩』中華書局 一九六〇年四月 第二冊 卷七一 七八一頁～七八二頁 詩の題目は「興慶池侍宴應制」である。
- (40)黄永武博士主編『杜詩叢刊』台湾大通書局印行、一九七四年一〇月。

- (41)『杜詩叢刊』の『集千家注批点補遺杜詩集(一)』宋 劉辰翁批点 元 高楚芳編 二六五頁。
- 不必有所從來不必有所指玄玄衆妙門〇七字浩然以其將隱也
- (42)『杜詩叢刊』の『杜詩闡(一)』清 盧元昌註 二二二頁
- (前略)一似掉頭不肯住者。謝病東歸。將入海。獨把釣竿。海底珊瑚。不難拾取。但東海之處。(後略)
- (43)『杜詩叢刊』の『草堂詩箋』卷二 宋 蔡夢弼會箋 廣文書局 三四頁。
- (44)『杜詩叢刊』の『集千家注分類杜工部詩(三)』宋 徐居仁編 黃鶴補註 一三五一頁
- (前略)趙曰珊瑚樹生海底石上見晉書大秦國事以其在海底故以拂言之也言巢父埴江東之後遂乃入海有此興也
- (45)森槐南『杜詩講義 下卷』文會堂書店 大正元年一月 六〇〇～六〇一頁
- (46)前掲21 一七丁ウ・一八丁才
- 主指導教員(佐々木充教授)、副指導教員(廣部俊也准教授・岡村浩准教授)